

<b>Title</b>	喜田敬氏報告「DBAE コンテンポラリーアートと保育造形」(<児童>における「総合人間学」の試み 研究会)
<b>Author(s)</b>	田澤, 薫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.5, 2012.3 : 30-32
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3860">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3860</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

# ＜児童＞における「総合人間学」の試み 研究会 喜田敬氏報告「DBAE－コンテンポラリーアートと保育造形」

田澤 薫

2012年2月15日に開催された今年度最後の研究会では、喜田敬氏（聖学院大学児童学科）が「DBAE－コンテンポラリーアートと保育造形」と題して報告くださった。多数の児童画を示しながら幼児による描画と指導の保育者の描画教育への意識との関連性にふれ、1980年代のアメリカでおこった美術教育運動である“DBAE”（Discipline Based Art Education）と保育造形についてお話し下さった。

以下は、報告内容の概要である。

1993年頃に日米英仏の幼稚園で「保育現場において保育者は、幼児の描画活動にいかなる影響を与えるかを検証する」ことを目的として、児童画の調査を行ったことがある。

そのときに、「直接的影響については、保育者の描画指導の傾向」に関心を向けて、「あなたの園では園児が絵を描くときに、主にどのような点に留意なさっていますか」と質問し、幼児の絵と比較をしながら直接的な影響力あるかどうかを検討した。

選択肢は以下の6つであった。

1. あなた自身が手本を描きながら描き方の指導をしている。
2. 別の人が描いた手本を示しながら指導している。
3. 絵の対象となるものをよく見て描くよう指導している。
4. 描き方の指導はしないが、子どもが絵を描いている間是对話するように心がけている。
5. 自由に描かせ、対話は控えている。
6. ほとんど絵を描かせていない。

2は、明治時代の臨画教育の方法で、イギリス辺りから入ってきたが大正年間に自由画運動が盛んになると「不自由画」と批判された。3は観察

画の方法で、パターン化した絵を描くことを嫌う指導者に広まっていることが予想された。

それぞれの国の幼稚園から、その国の文化背景が窺われるような回答が寄せられたが（詳細は、「喜田敬ほか「幼児の生活環境の中の動物達〈第4報〉一保育者と幼児絵画との関連性について－」和泉短期大学研究紀要第16号、1994,p.p.147-162」に譲る）、一例をあげれば、フランス（リヨン）の幼稚園では、「1.あなた自身が手本を描きながら描き方の指導をしている」が66.6%、「2.別の人が書いた手本を記しながら指導している」が半数、「3.絵の対象となるものをよく見て描くように指導している」保育者もあり、いずれの方法も採られていたことが分かる。提供をうけた年長児の作品は、輪郭線にマーカー使ったクレヨン画で、同じような印象を与える絵である。指導しているからだと考えられる。これらの絵を指導した保育者による記載は、1.2.4に○がついていた。しかも、2に注記として「とりわけコンテンポラリーな作品（ピカソ、マティスなど）」とあった。1993年の時点でDBAEの実践を行っていることに驚かされた。

リヨンの幼稚園で実践を見つけたDBAEは、Discipline Based Art Educationの略で、従来の図画工作や美術が巧緻性に関する評価で捉えられてきたことへの反論として生まれた教育運動である。指導者側で子どもの思いや子どもの生活体験から切り離された技術などを要求しがちであった過去の造形教育の歴史を考えると、改めて子どもの視座に立った子ども側の教材・表現指導の重要性が痛感させられるといった意識の中から始められた。

DBAEのプログラムでは、子どもたちがプロの作品を鑑賞することを基本とする。画家の作品を見せて「どう思う？」と問いかけディスカッショ

ンをする。子どもたちは想像力が豊かであるので、様々な意見を自由に発言できる。空想したり想像したりするには、見せる作品はコンテンポラリーなものが合うと考えられる。その後で模写をする。

この模写の工程が敬遠されて日本の幼稚園ではDBAEが受け入れられないのではないかと危惧されている。日本ではDBAEの研究をしている人の数も少ないが、世界的にはアメリカに始まったあとヨーロッパに波及し、イギリス辺りでも盛んに行われている。1999年ある日曜日の午後に、当時のテートギャラリーにおいて、大きなマチスの作品（2 m86cm×2 m87cm、1958年）の前で、幼児が親と一緒に日本の折り紙とスティックのりで作品の模写をしている姿に出会うこともある。

さて、DBAEで鑑賞や模写に用いるのが何でコンテンポラリーアートなのだろうか。

抽象画の創始者といわれるワシリー・カンディンスキーは、ロシアに生まれ、モスクワの大学で経済学・法律学を学び学位も取得した後、1895年に彼にとっての人生の大きな出来事を経験する。クロード・モネの「積藁」を鑑賞したことである。

モネは、晩年の「睡蓮」がよく知られている印象派の画家で、日本の浮世絵の影響を受けた人である。印象派の特徴の一つは構図にあるが、最も大きいのは内面だと思われる。

浮世絵を生んだ日本は、世界に類例を見ない複層的な封建社会をもっている。天皇と公家が士農工商のヒエラルキーの外に置かれ、公家、武家、町人の文化がそれぞれ存在し、上下関係が明確にしきれない。市民権の獲得闘争を繰り返してきた19世紀のヨーロッパの人たちにとっては、何百年前から庶民が独自の文化をもって自由に暮らしていた、お伊勢参りのガイドブックである「東海道五十三次」に代表される日本の庶民文化は新鮮に映り、江戸の町の屋形船がボートで遊んでいる図などで印象派の絵に取り入れられていく。

そうした自由なる精神によって描かれたモネの絵に、カンディンスキーは衝撃を受けた。モネの

「積藁」を目にしたときのことを、カンディンスキーは、後に「私の全生涯に烙印を押し、当時私を心底から揺り動かした2つの事件を体験した。それはモスクワで開催されたフランス美術展。第1にクロード・モネの「積藁」であり、そして帝国劇場におけるヴァグネル上演のローエングリンであった」と記している。このときカンディンスキーは、「何の絵かわからないこと、それが私には不快であった。画家がこんなにも不明瞭に描くことは不当だと考えた」と、好印象を持たないが、不思議なことに「そしてその絵が私の心を捉えた。しかも記憶に消しがたい印象をとどめて。いつもまったく思いがけぬときに、その細部に至るまでも、ありありと目の前に浮かんでくるのに気付いたとき、私は驚きもし、また当惑もした」と、非常に強い印象を残して、繰り返し記憶によみがえってくる経験をして、この絵が力を持っていることに衝撃を受けた。これが契機となって、カンディンスキーは、この次の年ミュンヘンの画塾に学ぶようになる。それから4年後にアカデミーに入ってから考えたことをメモにとり、10年ほどたったものによって名著『芸術における精神的なるもの』を刊行し、ヨーロッパの画家たちに大いなる影響を与えた。

カンディンスキーは、人には誰にでも秘められ閉ざされている気が付かないままであるものがあることを、自身の「積藁」との出会いを通して気



報告者の喜田敬氏

づかされた。またカンディンスキーは、著作の中でドビュッシーについても触れ、ドビュッシーは精神的に印象派の画家に似ているが、この音楽家の内面的な奥へ向かおうとする衝動は極めて激しいと記している。カンディンスキーは、このように、内面に秘められた覆い隠されているものを発見するその観察する力を持つべきだと主張するが、これがDBAEの考え方につながっていくのではないだろうか。

DBAEによって一体どういう結果がもたらされるのかではなく、無意識のうちに、芸術の中にあるものを読み取らせるというか感性をくすぐること自体に意味がある。

ところで、DBAEが広まった今日のヨーロッパでは、各地で様々な実践が見られる。

コンテンポラリーな作品を子ども達に見せる取り組みは、2002年のヨーロッパでも実際に多く見られた。ミロの美術館には、小学校低学年の子どもたちにもわかりやすく説明できる学芸員がいる。アントニ・ガウディのカサ・ミラの屋上でも、小学校中学年の子どもたちが学芸員の説明を聞いているところに居合わせたことがある。

また関連した書物の刊行もある。1999年にハロッズで購入した“A Child's Book of Art”は、「子ども達にアートを紹介するに早すぎることはない」という考え方のもとに編集された画集である。これは何々の絵として絵画作品の側から紹介するのではなく、たとえば“the family”というタイトルのもとに、家族を描いた様々な名画を集めている。子どもは絵本を見るようにして、絵の本を見ることになる。“in the bedroom”の項で、「これVincent van Goghじゃないか」と大人はわかるが、子どもはそんなこと言わなくても絵として楽しむ趣向になっている。日本で刊行されているペネロペの絵本『ルーブル美術館に行く』も同じようなねらいが読み取れる。

DBAEでよく取り上げられるパブロ・ピカソは、たいへんな天才ではあるが倫理的な人でないと一



数多くの作品資料が提示された。

般に理解されている。ピカソには自分の子どもを描いた作品も多いが、自分の子どもの絵のみならず、子どもの世界に興味を持った画家である。“Picasso's World of Children”というカタログによると、ピカソが子どもを題材にしてレリーフ作品を作ったのはわずか14歳のときであり、同じ年に自分の妹達も描いている。10歳の後半でパリに出てからも青の時代に子どもを描き、自分の子どもが生まれたあとは多くの作品を残す。

子どもを描く時のピカソが真のピカソなのではないかともいわれ、モネに並んでピカソがDABEに用いられる理由がこの辺りにあると考えられる。DABEでピカソと出会った子どもたちこそ、ピカソの作品に秘められた内面性の理解者になり得るかもしれない。

「いついかなるときも最大の空想家たる子どもたち」という言葉があるが、その子どもたちにこそアートのエッセンスを届ける活動が欧米で行われていることを、今後の保育造形のありかたを考えていく手掛かりとしたい。

(文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授)